

## 戦後77年 平和の尊さを語り継ぐ

戦争体験、平和への願いを子どもたちに伝える

くみんなで「平和最高!」と叫んだく

昭和20年8月15日に太平洋戦争が終結して今年で77年を迎えます。ロシアのウクライナへの侵略は今なお続いており、ウクライナ国民だけでなく、国際社会の平和と秩序、安全を脅かしています。核兵器の使用を示唆した一連の行為と併せて、断じて容認することはできません。

戦争の悲惨さと愚かさ、平和の尊さを次世代に引き継いでいかななくてはなりません。朝鮮からの引き揚げ体験をされた森本啓一さん(千僧5)が、自身の戦争体験を子どもたちにお話ししたことがきっかけで生まれた、平和交流について、お話を伺いました。

やあ、みんな元気かい。その後、夢に向かって青春してるかい。

当時の有岡小学校の孫のような6年生97人と友だちになった。きっかけは、平和の語り部として、学校で自身の戦争体験を話したことに始まる。子どもたち手作りの平和かるたを取り、カレーを食べ、その後卒業式にまで招いてくれた。

2015年8月に行った中央公民館での平和講演の様子が広報伊丹に掲載され、「子どもたちに話をしてほしい」と、有岡小学校から連絡をもらった。

戦争中、朝鮮半島にいた僕らの家族は、終戦とともに機雷の漂う玄界灘を10日ほどかけて日本へ引き揚げた。その戦時下の体験や、原爆の話を子ども達にしてほしいという内容だった。

1941年(昭和16)年、6歳のときに太平洋戦争が始まった。小学校は、国民学校になり、僕らは少国民と呼ばれ、1年生から教育勅語を覚えた。山に松根油を取りに行き、運動場の大鍋で炊いた。軍馬の餌となる藁や草取りも日課になった。手旗信号や敵機の種類を聴き分ける訓練。終戦の4年生まで、将来の夢は立派な兵隊さんになることだった。太平洋戦争末期、母が作ったカレーは、ちくわも無くなり小粒のジャガ

イモと色だけになった。野球の「ストライク」は敵性用語として厳禁とされ「良い球」に、「ボール」は「悪い球」になった。音階のドレミは、ハニホヘトに替えられた。

1945年、終戦のニュースは学校で聞いた。僕たち母子5人は父を残し、闇船に乗った。乗船前に命の保証はないと言われた。1畳に7人が寝た。身動きもできない。玄界灘には機雷が浮遊し、ソ連軍の臨検を避け、その度に島影へ隠れた。

祖国日本の地を踏んだ安堵の気持ちをどう表現したら良いのだろう。ただただ嬉しかった。毎日お腹を空かせてひもじかった。ラジオの「尋ね人の時間」をしがみつくように聞いた。そんな中でもみんな未来に希望を持ち、明るく元気だった。

有岡小学校の子どもたちは、私の話をよく聞き、問い、はつきりと答えてくれた。目は輝いていた。皆、「森本さん」と呼んでくれた。その後、子どもたちから、戦争や平和の真摯な感想文をいただいた。臉が熱くなってお札に詩を送った、「平和へのストライク、97人の君たちへ」。君たちが僕の語り投げ返してくれた答えは、若さいっぱいの「ストライク」だった。自由に堂々とストライクを投げた君たち。私たちは尊敬し合い多くのことを学んだ。

私にも6年生のときがあった。太平洋戦争が終わり、生活は貧しくひもじかったが、平和な明るい光だけが嬉しかった。

また、ヒロシマへの修学旅行の前には原爆の話をした。原爆は体験していないが、周囲のヒロシマ・ナガサキの被爆者から、胸がえぐられるいろいろな話を聞いていた。僕にとつてのヒロシマは、何度行っても街がまばゆく透き通って、爆心地へ立てば光の明るさが違って見えるという体験を話した。

その後、有岡小学校の6年3組から招待状が届いた。「森本さんへ。有岡小学校へ招待します! 1. 組体操を見てもらう。2. いっしょにカレーを食べる。みんな、感謝の気持ちを込めて、カレーを作ったり、歌ったりします。」

僕は教室で、これまでの人生で最高のカレーを食べた。肉がたっぷり、味も抜群。涙にぬれて食べた。何より君たちの気持ちが嬉しかった。組体操も素晴らし

かった。

あれから6年、世界は予想もしなかったロシアによるウクライナ侵攻が始まった。泣きながらかばんを引きずり歩いていく子どもの声が脳裏を突き刺す。

戦争はなぜ起きるのだろう。生きとし生けるもの全ての、かけがえのない地球。あるとき「平和最高！」と叫んだその力を一つにして、その歩みを止めてはならない。

〔「広報伊丹」令和4年8月1日号掲載〕